

とやまと自然

第48巻 第1号

No.188 2025

とやまわん
富山湾のヤドカリ

うおづ すいぞくかん きむらともはる
魚津水族館 木村知晴



とやまわん
■ 富山湾に生息するアカボシヤドカリ

カラー版をホームページに掲載しています。

とやまわん
富山湾のヤドカリきむらともはる うおづすいぞくかん
木村知晴（魚津水族館）

1. はじめに

海岸で潮だまりや岩の隙間などを覗き込んだ時に巻貝が素早く動くことがあります。そんな貝には、たいていヤドカリが入っています。ヤドカリは磯遊びなどで誰でも簡単に観察することができる身近な生き物の一つです。

でも残念ながらヤドカリたちの細かい種名を知っている人は少なく、中にはヤドカリはみんな同じ1つの種だと思っている人もいます。実際には、いろいろなグループや種類があり、日本周辺だけでも約500種ものヤドカリの仲間が生息しているのです。

今回は「ヤドカリ」と聞いて多くの人々がイメージする、主に巻貝に入って生活しているヤドカリ科とホンヤドカリ科のヤドカリを中心に紹介します。

2. ヤドカリってどんな生き物？

2.1 ヤドカリの特徴

ヤドカリの特徴を簡単に説明すると、体の大部分が硬い殻で覆われていて、脚（胸脚）が5対（10本）ある。10本の脚のうち、一番前の2本は先がハサミ状で、一番後ろの2本または4本はその前にある脚に比べて明らかに小さくなっている。腹部が曲がっていて、貝殻に入っている、……ことが多い生き物です。ただし、例外もたくさんあるので一言で説明するのは難しいです。

2.2 ヤドカリの体

図1を見てください。この写真は成体のヤドカリの体を貝殻から出して、真上から撮影したものです。一般的なヤドカリの体は頭胸部と腹部と尾部から成ります。頭胸部からは、先がハサミ状になっている第一胸脚（ハサミ脚）2本と、歩

くための大きな胸脚（第一・第二歩脚）4本、そして小さな胸脚4本が出ています。これらはどれも胸脚と言えますが、役割が違うため今後は分かりやすいように第一胸脚を「ハサミ脚」、第二・第三胸脚をまとめて「歩脚」と表記します。眼は細長い棒（眼柄）の先端にあります。眼柄の根元からは触角4本が出ていて、眼の間にある短い2本が第一触角、眼の外側から出ている長い2本が第二触角と呼びます。腹部は柔らかく、巻貝に入りやすいように右側に曲がっています。尾部は腹部の先端にあり貝殻をつかみます。

普段は巻貝に体の後ろ半分以上を収納しているので、生きている時に見える部分は触角から歩脚までのわずかな部分だけです。

腹部は必ず右側に曲がっています。左向きに曲がっているヤドカリがいないのは、海に生息する巻貝のほとんどが右巻きだからです。左巻きの貝殻を海中で見つけるのはとても難しいため、左巻きの貝殻を選んで入るヤドカリは現れなかったのでしょうか。

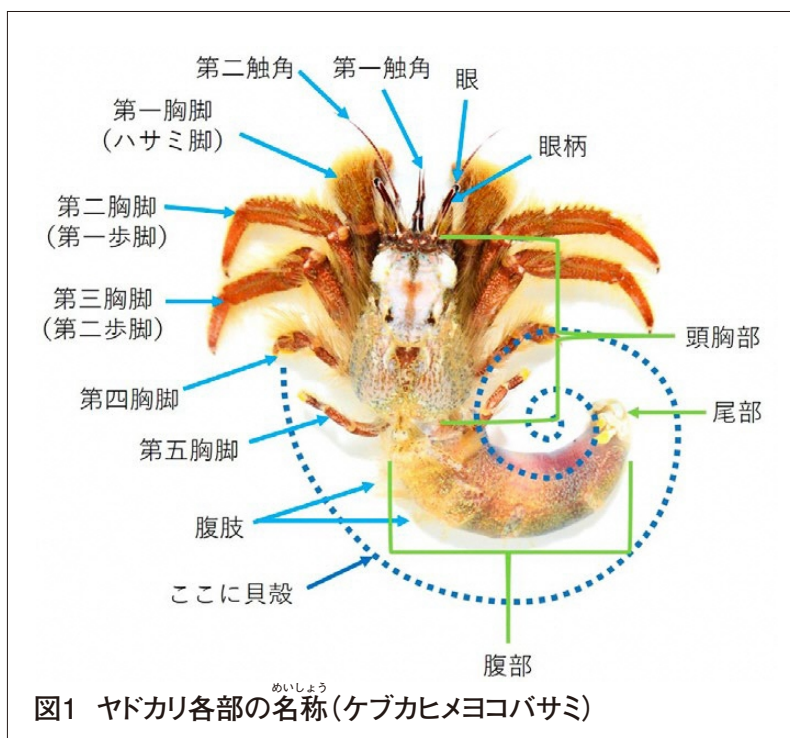


図1 ヤドカリ各部の名称(ケブカヒメヨコバサミ)

2.3 どうして貝に入るの？

体よりも大きくて重たい貝殻は歩くときに邪魔そうに見えます。わざわざ貝殻に入って生活するのは、身を守るためです。小型の甲殻類を好んで食べる生き物は魚やタコなどたくさんいます。他の生き物に狙われた時でも、硬い貝殻の中に隠れてしまえば、まず引っ張り出されることはありません。貝殻が割られない限りは安全でしょう。特にヤドカリの腹部は、エビやカニのように硬くはなく、とても柔らかいので最大の弱点と言えます。ほとんどのヤドカリが動くスピードよりも防御力を強化することを選んだようです。

2.4 貝殻に入る時期

ヤドカリのメスは卵を産むと腹部の左側にある腹肢に卵をくっつけます(図2)。その場所はいつも貝殻の中に入っているのです、外からはほとんど見えません。卵がふ化するまでメスは安全なところに隠して育てるのです。卵からかえった赤ちゃんは海の中に放たれます。生まれた直後の赤ちゃんは普通のヤドカリとは全然違う姿をしていて、貝殻には入っていません。しばらく海の中を漂って生活し、脱皮をして成長します。5回ほど脱皮するとヤドカリらしい姿になりますが、まだ貝殻はありません(図3)。海底に降りるとすぐに落ちていく貝殻を探して、その中に入ります。貝殻は成長しないので、ヤドカリが脱皮して体が大きくなると入っている貝殻が窮屈になってきます。窮屈になると他の貝殻を探して、引っ越しをします。

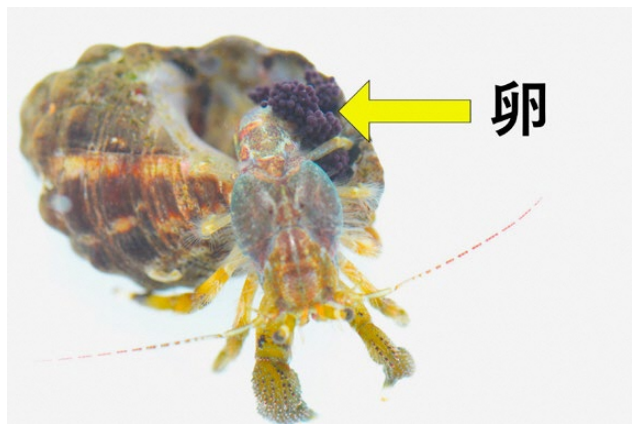


図2 卵をもっているメス(ホンヤドカリ)



図3 泳いで生活するヤドカリの赤ちゃん

2.5 引っ越し

ヤドカリは入っている貝殻が気に入らない場合、もっといい貝殻を見つけると引っ越しをします。落ちていく貝殻を見つけると、形や大きさを確認します。中に砂などが入っている場合は貝殻を回転させて出します。チェックを終えると、入っている貝殻から体を素早く引き抜き、新しい貝殻に素早く潜り込みます。体全体が外に出ている時間はわずか1秒ほどです。

ちょうど体にぴったりサイズの貝殻が都合よく落ちていくことは少ないです。周りには同じような体形のヤドカリたちが住んでいるので、貝殻は取り合いになります。誰かが引っ越ししたら、その空いた殻に別のヤドカリがすぐに入ることもあります。時には他のヤドカリに体当たりなどの嫌がらせを繰り返し、中に入っているヤドカリを追いついてその貝殻を奪い取ることもあります。

3 富山湾のヤドカリ

富山湾では2024年までにヤドカリ科とホンヤドカリ科のヤドカリは合わせて28種が報告されています。その中で、比較的よく目にする種や特徴的な種を厳選して紹介します。

3.1 ヤドカリ科

ハサミ脚の大きさが、左右で同じか、左のハサミ脚が大きなグループです。大型から小型まで様々なサイズの種がいます。暖かい海に生息する種が多いです。

3.1.1 アカボシヤドカリ (図 4)

富山湾で見られるヤドカリの中では大型で、サザエやアカニシ、テングニシなど大きな貝殻に入っていることが多いです。特徴は眼柄（眼のついてる棒）の色です。鮮やかな青紫色をしているヤドカリは富山湾では他にいません。眼柄の色がチラリとでも見えれば、一瞬で名前の判断ができます。眼柄や緑色の眼に注目してしまい、あまり印象に残らないのですが、ピンク色の体に赤い小さな点々がたくさんあることが名前の由来のようです。砂地にすんでいて、日中は体と貝殻の大半を砂にうずめ、眼だけ出していることが多いです。夜になると砂地を歩き回ります。



図4 アカボシヤドカリ

3.1.2 ケスジヤドカリ (図 5)

ハサミ脚と胸脚がシマシマ模様になっているのが特徴です。ハサミ脚や胸脚がちゃんと見えれば、間違えることはないでしょう。アカボシヤドカリと同じく大型になる種で、ヤツシロガイやアカニシ、サザエなどによく入っています。貝殻の上にヤドカリイ



図5 ケスジヤドカリ



図6 貝殻にイソギンチャクを4つ付けているケスジヤドカリ

ソギンチャクを付けていることが多く、それも判断材料になります(図6)。イソギンチャクを貝殻の上に付けているのは、防御力をさらにアップさせるためです。イソギンチャクの触手には毒針（刺胞）があるため、多くの魚やタコはイソギンチャクに触ろうとしないためです。貝殻を引っ越す際には、殻につけているイソギンチャクも剥がして新しい貝殻の上に引っ越しさせます。

3.1.3 トゲツノヤドカリ (図 7.1)

砂地に生息しているヤドカリで、第二触角が鳥の羽根のようにふさふさしています。左のハサミ脚が右のハサミ脚よりも大きく、その外側にヤドカリコテイソギンチャクを付けているのも特徴です。イソギンチャクを付けているという点はケスジヤドカリと同じですが、付ける場所が違います。

トゲツノヤドカリは貝殻に隠れた時、左のハサミ脚が入り口のところにくるのですが、そこにイソギンチャクが付いているため、イソギンチャクで入り口を塞ぐ形になります(図 7.2)。ケスジヤドカリよりもさらに効果の高い防御方法だと思います。



図7.1 トゲツノヤドカリ



図8 ケブカヒメヨコバサミ



図7.2 トゲツノヤドカリは貝殻に隠れると、イソギンチャクで入り口をガードする。



図9 コブヨコバサミ

3.1.4 ケブカヒメヨコバサミ (図 8)

富山湾に潜ってヤドカリを探すと一番個体数が多いと感じるヤドカリです。ただし存在感は低く、意識しないとたくさんいることに気が付きません。体よりも一回り大きな貝殻に入っていることが多く、通常時でも体はあまり見えていません。また、動きもヤドカリの中では比較的ゆっくりです。さらに、貝殻の中に隠れると、奥まで引っ込むため体がほぼ見えなくなります。一度隠れるとなかなか出てこないで、種類の確認が難しいのですが、逆に私は姿が全く見えないことで本種と判断することもあります。確実な見分けポイントは第二触角がフサフサで眼柄に黒い縦縞があることです。

3.1.5 コブヨコバサミ (図 9)

中型のヤドカリで、左右のハサミ脚の大きさはほとんど同じです。焦げ茶色の歩脚にオレンジ色の縦縞が目立ちます。富山湾には似た色彩のヤドカリがいないため、識別は簡単です。特に浅い所を好むようで、波打ち際を歩いて探すと見られます。富山湾では高岡市の雨晴海岸でよく見られます。

3.2 ホンヤドカリ科

右のハサミ脚が左のハサミ脚よりも大きいグループです。浅いところに生息する種は小型であることが多く、大型の種は冷たい海を好む種が多い傾向があります。



図10 ホンヤドカリ



図12 ホシゾラホンヤドカリ



図11 ケアシホンヤドカリ



図13 ユビナガホンヤドカリ

3.2.1 ホンヤドカリ (図10)

浅い海に多く住んでいるため、富山湾でヤドカリを探すと最初に出会うことが多いのがホンヤドカリです。体は深緑色で、歩脚の先にはまるで指輪をはめているかのように白と黒の帯があります。また、触角は茶色と白のシマシマ模様です。まずはこのホンヤドカリの特徴を覚えて、他の種を探しましょう！

3.2.2 ケアシホンヤドカリ (図11)

本種も浅瀬で見られるヤドカリですが、ホンヤドカリよりは個体数が少なめです。体は緑色で黒い小さな点々があり、両方の触角が赤いのが特徴です。

3.2.3 ホシゾラホンヤドカリ (図12)

体は緑色で触角が赤いので、ケアシホンヤドカリとよく似ていますが、体にある点々が黒ではなく水色です。よく比べてみると、触角の色もわずかに違い、本種の方がより濃い赤色をしています。富山湾では2022年に初めて確認された種ですが、魚津市の海でよく探してみると、水深2～5mに転がっている石の下や隙間に多く生息していることが分かりました。石を持ち上げないと見つけるのが難しいですが、見つけるととても嬉しくなります。

3.2.4 ユビナガホンヤドカリ (図13)

本種も浅瀬の岩場や砂地、アマモ場などでよく見られます。体は薄茶色で歩脚にはうっすらと黒っ



図14 ベニホンヤドカリ



図16 ゼンマイヤドカリ



図15 クロシマホンヤドカリ



図17 ゴトウヤドカリ

ぼい縞があり、触角も縞模様になっています。名前の通り、成体は歩脚の指節（一番先端の節）が長いですが、小型個体はあまり長くありません。これといった特徴が少ないので、水中で見ると判別にちょっと悩むことがあるヤドカリです。

3.2.5 ベニホンヤドカリ (図14)

全身鮮やかな赤色をしていてとても目立つ中型のヤドカリです。体の赤色にばかり注目されがちですが、眼もキレイな緑色をしています。海の中では昼間は岩の隙間などに隠れていて、夜にならないとあまり動きません。暗くなってから海に潜ると、岩の上や砂地を堂々と歩き回っています。

3.2.6 クロシマホンヤドカリ (図15)

脚に黒い縦縞がある小型のヤドカリです。富山湾では2021年に初めて確認された種ですが、個体数が多いことから、それ以前から生息していたと推測されます。岩やコンクリートブロックなどの隙間や側面にいることが多く、捕まえようと手を伸ばすと岩から脚を離し転がり落ちて逃げ去ります。落ちる場所を予測しておかなければならないので、捕まえるのにコツがいるヤドカリです。

3.2.7 ゼンマイヤドカリ (図16)

やや深場の砂地や砂泥底に生息するヤドカリです。脚は長く、しわのような縞模様が入っているのが特徴です。このヤドカリは、なんと水中を泳ぐこ

とができます。身の危険を感じた時などに、長い脚をシャカシャカ動かして泳いで逃げていきます。ヤドカリ類は赤ちゃんの時はみな泳いで生活しますが、大人になって貝殻を背負ったまま泳ぐことができるヤドカリはほとんどいないでしょう。

3.2.8 ゴトウヤドカリ (図 17)

紫色で個性的な形のはさみ脚のインパクトが強烈で、一度見たら忘れられないヤドカリです。魚津水族館では漁師さんの網にかかった個体を展示していたこともあります。富山湾では深海に生息しているため、海に潜っても出会えません。北海道では浅いところでも見られることがあるそうです。一度でいいから水中で会ってみたい、私の憧れのヤドカリです。

4 ヤドカリの探し方

ここまで色々なヤドカリを紹介してきましたが、これらのヤドカリに出会うためにはどうしたらいいのでしょうか？まずは岩場のある海に行ってみましょう。富山湾沿岸では高岡市の雨晴海岸や氷見市の小境海岸がヤドカリを探しやすい場所です。特に雨晴海岸は波打ち際に岩が並んでいる富山県では数少ない環境があります。波の穏やかな日であれば、海の中に入らなくてもヤドカリを見つけることができます。ヤドカリを見つけたら、観察ケースやバケツなどに入れて観察してみましょう(図 18)。

もっとたくさんのヤドカリに出会いたい人はスキューバダイビングに挑戦してみましょう。ヤドカリは釣りでは狙っても釣れず、漁師さんの網にもほとんどかからないので、自分の目で探すのが一番効率がいいのです。私は水族館の仕事として富山湾に潜って、どんな生き物がいるかを調べています。空気ボンベを背負って、水深 30m くらいまでの深さで、30 分～1 時間くらい調査をします。岩の隙間や石の下などを水中ライトで照らすといろいろなヤドカリを見つけることができます。でもヤドカリの入っている貝を手でひっくり返しても、ヤドカリは貝殻の中に隠れるので姿がほとんど見えません。姿を確認したいときは、その貝を岩の上などにそっ



図18 ヤドカリを観察している子どもたち

と置き、ヤドカリが出てくるまでじっと待ちます。体が出てくるまでの時間は種や個体によっていろいろで、早いヤドカリでは3秒くらい、警戒心の強いヤドカリでは5分以上かかることもあります。よそ見をしている間に逃げられたり、体を見られずに諦めたりすることもあります。ヤドカリを観察するには根気が必要なのです。

5 終わりに

私は趣味でもスキューバダイビングをするので、他の県でも海に潜ったり、磯で探したりして、これまでに50種以上の野生のヤドカリに出会いました。たくさんのヤドカリを観察すると、それぞれの種ごとの姿や行動の違いなどが分かるようになり、今まで出会ったことがないヤドカリにより気がつくようになりました。そして私が富山湾に潜って本気でヤドカリを探したところ、これまで富山湾から報告のないヤドカリが次々と見つかったのです。富山湾のヤドカリの種類数はまだまだ増えそうです。これからもいろいろなヤドカリを探して観察しようと思っています。皆さんも海岸に行った際には、ヤドカリを探して観察してみましょう。

